本多延嘉年譜

（一九三四年～一九七五年）

【誕生から早稲田大学時代】

一九三四年　二月六日　父光治、母喜美子さんの長男として、東京市神田區和泉町に出生、浅草鳥越で育つ。父は全逓労働者。弟、妹各一人。「労働者の子、農民の孫として生まれた」を終生の誇りとする。

一九四〇年　浅草柳北小学校に入学。

一九四四年　第二次大戦の戦火がはげしくなるなかで一家とともに埼玉県北足立郡足立町（現志木市）に疎開。宗岡小学校に転入学。

一九四五年　八月　日本帝国主義のアジア侵略戦争・第二次世界大戦での軍事的敗北を小学校六年生で迎える。

一九四六年　三月　宗岡小学校を卒業。

四月　旧制中学の最後の世代の一人として県立旧制川越中学校入学。

一九四八年　戦後革命の嵐とその敗北のなかで政治的、思想的にめざめ青年共産同盟（後の民青）に加盟。

一九四九年　四月　川越高校に入学。

一九五〇年　創部された新聞部に属す。『川越高校新聞』を編集、執筆。弁論部にも所属。中学・高校を通して剣道部には所属せず剣道の稽古を積む。

一九五一年　二月　高校二年生のとき日本共産党に入党。高校および居住細胞で精力的に活動。「模範的な共産党下部党員だった」と自ら語る（『七〇年をどうする』田園書房、一九六九年五月刊）。その後も、故郷には彼の支持者が数多くいた。

一九五二年　三月　川越高校卒業。大学受験するも浪人となり一時期予備校に通うが受験戦争に駆り立てる予備校を批判、すぐに退学。自習する。

一九五三年　四月　早稲田大学第二法学部入学。早大新聞会に入部。

一九五四年　四月　同大第一文学部国史学科に転入学（一九五八年中退）。早大新聞にて早くから編集長をつとめ抜群の才をあらわし、多くの後輩を育てる。早大新聞、日共早大細胞（当時四〇〇人いた）の指導的位置にあり、早大および首都の学生運動で大きな役割を演じる。

一九五五年　七月　日共六全協に接し、スターリンに代表される国際共産主義運動および日本共産党の綱領（戦前の三二テーゼ、戦後の五一年綱領）とその革命戦略にふかい疑問を感じる。日本共産党に体現される戦後一〇年間の革命運動を内的に反省する第一契機となる。

【革命的共産主義者同盟全国委員会の創設へ】

一九五六年　一〇月　ハンガリー革命。その衝撃を受け、革命家として人間的に悩みぬき、この現代史的問題性を深刻にとらえかえす。「そばでみていても痛々しかった」と早大新聞会の後輩が語る。共産主義運動の根本的再生のため、共産党員として自己批判を課し、反スターリン主義のたたかいを決意。

一九五七年　八月　黒田寛一が弁証法研究会を創設（一〇月『探究』を発刊）。

一二月　弁証法研究会に参加。いわゆる探究派に属す。

一九五八年　革命的共産主義者同盟の創成に加わる。探究派の中心となる。

三月　白井朗（山村克）が弁証法研究会に参加、つづいて木下尊晤（野島三郎）が加わる。小野田猛史（北川登）が参加。

七月　トロッキー教条主義者・太田竜とたたかい、革共同第一次分裂。それをつうじて、反帝国主義・反スターリン主義世界革命の綱領的立場を実践的＝思想的に確立する。日共早大細胞にて宮本派を打倒、指導権を掌握。日共早大細胞と早大新聞は、全学連の活動家＝学生日共党員の「左への転換」の拠点の役割をはたした。

一二月一〇日　共産主義者同盟（ブント）創立大会に探究派として参加。事前に島成郎ブント書記長から機関紙『戦旗』編集長への本多就任の提案、革共同のブントへの合流の誘い（実質的な併呑）があった。政治局内で「島提案辞退」を提起し決定となる。

一九五九年　七月　黒田「レーニン『国家と革命』への疑問」（『探究』七号掲載）を小野田（北川）とともに壊滅的に批判、黒田は反論できず。

八月　田宮健二署名「反スターリニズムのたたかい――革共同関東大会提出」（いわゆる田宮テーゼ）を執筆、提起。

八月三一日　トロッキー教条主義西派と決別（革共同第二次分裂）し、革共同全国委員会創設、書記長に就任。革共同労対を組織（責任者＝木下［野島］）、そのもとに国鉄委員会（全線委員会と称す）を組織。東京における各地区委員会を組織。

この過程は同時に、黒田・大川治郎（本名・小泉恒彦）スパイ問題（一九五七年後半から翌年春にかけて数カ月間）での西派からの攻撃、黒田による書記局活動の解体、非組織的逃亡、サークル主義的非実践性との厳しいたたかいとしてあった。西派が暴露した黒田・大川スパイ問題について、大川を追及、除名。小野田、白井とともに黒田を約二カ月にわたって追及。黒田は大川が警視庁公安部から情報提供を迫られていたこと、相談を受けて「それなら民青の情報を売ったらどうだ」と応じたこと、大川および黒田夫人とともに公衆電話から警視庁公安部に電話したが恐くなって逃げだしたこと、その後も大川が情報を売っていたことを容認していたことを白状。「大川に乗せられただけだ」「未遂だから責任はない」などの弁明を論駁し大川主犯ではなく黒田主導であったことを批判。会議での自己批判表明を要求するが黒田は対応不能状態となる。黒田の革命家失格を確認し追及は打

ち切った。

九月　「反帝・反スターリン主義の旗のもと革共同全国委員会に結集せよ」（『前進』創刊号）。『前進』をみずからガリ版で創刊。以後一貫して機関紙の指導にあたる。

一〇月　革共同関西地方委員会を創立（初代議長は池内史郎［浜野哲夫］、後に交代）。

同月　「破産した政治革命――血の刻印はいつ消える」（早稲田大学新聞）。

一九六〇年　二月　木下（野島）「芸術本質論序説」（『探究』八号掲載）を高く評価、黒田は自分には書けないものを野島が書いたとショックを受ける。

四月、五月、六月　安保反対・岸内閣打倒の六〇年安保闘争が歴史的な高揚。その最先頭にたってたたかう。常に「革共同」と染め抜いた大きな旗を掲げて現場に立った。

六月　労対・木下とともに松崎明らの国鉄尾久機関区を拠点にした六・四政治ストライキ闘争を指導。

同月　「六・四ストとわが同盟のたたかい」（七月五日付チラシ）。

同月　すでに兆しがあったブント瓦解が始まる。島はブントの指導を投げ出す。戦旗派（陶山健一［岸本健一］）、守田典彦［青山到］、鈴木啓一［森茂］ら）とプロレタリア通信派（清水丈夫［岡田新］、青木昌彦［姫岡玲治］、北小路敏、藤原慶久、西部邁ら）と革命の通達派（服部信司、長崎浩ら）に三分裂。

八月　武井健人編著『安保闘争――その政治的総括』（現代思潮社）を出版。

九月　「共産主義者同盟の破産は何を意味するか」（『前進』一五号）。

一一月　「永久革命の幻想者・吉本隆明との決別」（『前進』一七号）。

同月　「誤謬の拡大再生産を許すな」（『前進』一八号）。

同月～一二月　「『絶対主義天皇制』論の亡霊批判」（『早稲田大学新聞』上・下、後に「天皇制ボナパルティズム論」と改題）。

一九六一年　一月　マルクス主義青年労働者同盟を結成（議長・松崎明［倉川篤］）。労対は木下が継続。

二～四月　革命的戦旗派を始め多くのブント活動家が革共同に結集・加入。六〇年ブントの解体・吸収にめざましい指導的役割を演じる。その過程で著作家・黒田の権威以上に本多の構想力と高い理論性が大きな力を発揮。また労働者階級に根ざした党としての革共同の底力にブント活動家が惹きつけられた要素があり、「オルグの野島」の存在も大きかった。

三月　「すべての革命的共産主義者は革共同全国委員会に結集せよ」（『前進』一二六号）

六月　「公然と大胆に闘争の先頭に――六一年政暴法闘争の総括」（『前進』三三号）。

八月　「『春日新党』と新中間主義」（『前進』三六号）。

【革共同三全総と黒田一派の逃亡】

八月　革共同第一回大会。黒田（山本勝彦）議長・本多（武井健人）書記長の政治局体制を確認。

その後、松崎が木下との会談で「マル青労同議長を山川（木下）に譲る」といい出す（東部地区委員会・前迫勝士の江戸川区の自宅にて）。その背景には国鉄総裁・十河（そごう）信二による松崎への肩たたきがあった。松崎は懐柔策にぐらつき、労働者革命家の道を進むことにたじろいだ。本多が松崎を説得、議長に慰留し、重責を分有するとして副議長に木下を据える（前迫宅にて）。

九月　「革命的共産主義運動の現段階と革命的プロレタリア党創造の課題」（『共産主義者』上・下連載）。反スターリン主義・革命的共産主義運動はどこからきて、どこにいこうとしているのかを鮮明に解明、展開した綱領的な論文。

一〇月　「ベルリン危機と労働者階級」（『前進』六九号）。

同月　「北方問題と反ソ主義」（『前進』七〇号）。

一一月　「再び西分派の同志諸君へ」（『前進』七二号）。

一九六二年　一月　「ロシア革命と現代世界」（『早稲田大学新聞』）。

三月　「春日なき春日派の命運」（『前進』八四号）。

七月　「支持者の渦から推進者の奔流を――六二年参院選挙闘争の総括」（『前進』九五号）。黒田を候補者とした参院選闘争に寄せられた二万三〇〇〇票を階級的、構造的に分析し、進むべき勝利の道を明らかにした。

八～九月　革共同三全総を準備する段階で黒田は本多指導に対抗して、清水丈夫（学対部長）ら学生指導部による学習会フラク「Qの会」を秘密裏に組織。

九月　革共同第三回全国委員会総会（三全総）開催。同盟内にはらまれていたサークル主義的体質の克服、革命的自己脱皮のたたかいを宣言。同盟のボルシェビキ的強化・発展（「地区党の建設」）と「戦闘的労働運動の防衛と創造」の路線を提起。「統一戦線戦術の展開」「労働者の反戦闘争・政治闘争への決起」「『前進』の強化・拡大」の路線・方針を決定。これらは革命的労働者党を生きた階級闘争のなかで創成・発展させるたたかいの本格的開始であった。黒田は「Qの会」の存在を隠したまま三全総に賛成。

同時期　「革命的共産主義運動の当面する問題点」（『前進』一〇〇号から五回連載）。

一〇月下旬　黒田が三全総をもってする革共同の新たな飛躍のたたかいにひるみ反発し、地区党の意味と意義に無理解なまま、「Qの会」をテコに革共同内に隠然と黒田派を結成。松崎らが参加。

黒田が地区党建設に産別労働者組織を対置する論文を発表（『前進』第一〇六号掲載）。そ

れとは別個に、木下（山川）指導を念頭に置いた「労対指導の腐敗について」（一〇月三〇日）という私的文書を作成。松崎の経済主義・組合主義と抱合する意図。三全総路線とそれをうち出した本多を面と向かって批判できないため、労対の現場指導を担う木下労対への批判を、しかも私的にやった。

同月　「ハンガリア革命と反スターリン主義運動の創成」（『前進』一〇六号。一〇七号）。

一一月一日　政治局会議で本多らが黒田文書の非組織的配布を弾劾、黒田が文書撤回を表明。しかし黒田は同文書を秘密裏に配布。さらに松崎ら若干の労働者とフラク、「分裂を覚悟」と表明（一一月八日）。

清水が黒田に追随して、黒田発言を文書化した「Qの会メモ」を作成し内密に配布。

一一月一四日　再度、黒田文書についての政治局会議（府中市の黒田宅）。黒田は文書撤回を表明する一方で卑劣な開き直りを示し、支離滅裂な態度に終始。本多が黒田の陰謀的分派策動を弾劾、同時に戦闘的労働運動防衛路線への無知・無理解を批判。黒田は何の返答もできず。木下が同様に清水の陰謀的な非組織的活動を批判、「日ごろからレーニン主義を強調している君がいっていることとやっていることが違うではないか」と追及。清水は顔面蒼白となって、「レーニン主義に反した」と自己批判。黒田は終始沈黙。本多が会議を打ち切り退席、清水が本多の後を追いすがり、本多派に合流。この間、鈴木（森）は国際部活動でヨーロッパ派遣のため不在。

一一月三〇日　大学管理法反対闘争に六〇〇〇人、東大本郷・時計台前（銀杏並木）から文部省デモ。社学同との統一戦線・統一行動実現を指導。黒田派（山本派）は統一戦線・統一行動を社学同への屈服として否定、統一行動・大衆運動否定のために「党のためのたたかい」を対置する誤りを純化。

一二月一四日　黒田は秘密裏に分派結成を呼びかける。分派会議を開催（一六日）。「分派」とはいうものの、政治局指導拒否の実質的な別党コース＝組織分裂に踏み切る。

一二月二五～二六日　東京都学生細胞代表者会議。池上洋司（朝倉文夫）ら黒田派が清水学対部長を解任。黒田派（二六人）と政治局派（一三人）に完全に分裂。この過程のマル学同の会議で、清水が黒田派であった自己の反レーニン主義の誤りを自己批判。

一二月二八日　政治局会議。「党内闘争」という表現をとっているが、この時点までに事実上の革共同第三次分裂となった。

【三全総からベトナム・日韓闘争】

一九六三年　一月一日　政治局と関西地方委指導部の合同会議。

同月五日　「黒田寛一の卑劣な『分派活動』を糾弾する」（同盟内部通達）。

一～三月　本多、木下、陶山らが先頭に立って黒田批判を展開。黒田からの反論ならぬ反論。

二月　「日帝の南朝鮮侵略を許すな――日韓会談と労働者階級」（『前進』一二三号）。

同月　黒田、松崎（倉川）、鈴木（森）らの連名による組織分裂宣言（機関誌『共産主義者』七号を僭称・発刊）。非和解的な組織的対立が激化。

マルクス主義学生同盟内の政治局派（少数派）が「マル学同中核派」を結成。

三月　「同盟内日和見主義との闘争のために」（『前進』一二五号）。

四月　黒田らが機関紙『解放』発刊をもって「革命的マルクス主義派」を名乗る。この間、分裂と敵対の道に転落したカクマルとのたたかいを先頭に立って指導。

四～六月　「革命的共産主義運動の基本路線とはなにか」（『前進』一三〇号から七回連載）。

八月　「第四インターの分解と中ソ論争について」（『前進』一四七号）。

九月　九・一三原子力潜水艦寄港阻止・日韓会談反対の第一波統一行動（清水谷公園～外務省デモ）の実現を指導。カクマルは統一行動に敵対し脱落。直前に根本が警視庁に「あのデモはでたらめだから取り消してくれ」と掛け合いに出向く。当日は根本、池上が数十人のカクマル暴力部隊で介入、これをいっきょに粉砕。この年前半で全国的、全戦線的にカクマルを圧倒。

同月　「同盟四全総討議の深化のために」（『前進』一五一号）。

同月　労働者階級解放闘争同盟が革命的に解体、その指導部分が革共同全国委に結集。

一〇～一一月　「中ソ論争と現代革命の展望」（『前進』一五四号から四回連載）。

一九六四年　一月　「日本帝国主義のあらたな攻勢と労働者階級の任務」（『前進』一六五号）。

四月　四・一七スト中止にたいし労働者階級の進むべき道を指し示す指導を展開。

五月　「国際スターリン主義の分解と日共中枢の分裂について」（『前進』一六九号）。

六月　「四・一七スト中止の教訓と日本労働運動の展望」（『共産主義者』一〇号）。

七月　「反スターリン主義運動の結集と前進をかちとろう」（『前進』一九四号）。

九月　「革命的共産主義運動の現段階と同盟の任務」（『前進』二〇〇号）。

同月　五全総の討論を主導。第三報告を提起。ベトナム・日韓を中軸に世界革命における民族・植民地問題の意義を提起し、革共同のベトナム・日韓闘争における指導的役割を確定する端緒をきりひらく。

一九六五年　一月　「激化する反動の嵐に抗して労働運動の転換を進めよう」（『前進』二一五号）。以降、ベトナム反戦・日韓闘争を全力で指導。

二月　「中国革命の危機を突破する道は何か」（『前進』二一九号）。

同月　「天皇制的圧制の象徴としての紀元節」（『前進』二二一号）。

三月　参院選政策を展開。「浜野哲夫統一候補の決定に際して」（『前進』二二三号）。

四月　「総力あげてベトナム・日韓をたたかいぬこう」（『前進』二二一九号）。
七月　池内史郎が浜野哲夫のペンネームで社会主義労働者戦線（革共同全国委とブントと長崎社会主義研究会）の代表として参院選に立候補。
八月　総評傘下の労働組合青年部を軸に反戦青年委員会が結成される。三全総路線の実践的適用として反戦青年委を積極的に担う政策を指導。
一一月　「インドネシア九・三〇事件の本質」（『前進』二二五八号）。
一九六六年　二月　「早大闘争の意義は何か――「真理の大学」を回復するために」（『前進』二二六五号）。
同月　早大全共闘四年生連絡協議会主催のティーチインで講演。
四月　「資本制社会と大学」（『前進』二二七八号）を発表。
六月　「社青同解放派の「共産主義」論批判」を執筆。この間、早大学費・学館ストライキのバリケードでの講演会、学習会に招かれ早大生と交流。
同月　「中国の危機と日本左翼の危機」（『前進』二二八九号）を発表。中国文化大革命を研究しその批判をたびたび展開。
九月　革共同第三回大会を開催。第三報告「日本階級闘争の危機と革命的左翼の任務」を提起。「戦後世界体制の根底的動揺と日帝の体制的危機」の世界史的認識を提起し、それにふさわしい同盟の戦闘体制の構築と飛躍へいっそう精力的に活動。第一報告は陶山「第二回全国大会以後の同盟活動の総括」、第二報告は清水「国際国内情勢の基本的特徴点について」。大会実行委員長は木下。

【一〇・八羽田から激動の七カ月、二つの一一月決戦】

一九六七年　一月　新年号論文「激動の一九六七年を迎えて」（『前進』三二一五号）。
同月　「深刻化する中国社会の危機」（『前進』三二一六号）。
二月　「紀元節復活と日本帝国主義の危機」（『前進』三二一〇号）。
六月　安保六・一五記念集会（九段会館）で革共同を代表してあいさつ。
同月　切迫する七〇年闘争を前に「政治局員は講演や執筆では本名を使用する。わが身をさらし、いつ権力の弾圧で逮捕されてもいいという覚悟を示す」と指示。
七月　「開始された七〇年闘争――革命的左翼の双肩に重責」（『前進』三四一号、「本多延嘉」署名で発表された最初の論文）。
八月　三里塚闘争への取り組みを決定。九月一日に全学連が反対同盟集会に初参加。
九月一四日　法政大学大衆団交にたいし日共系理事が独断で機動隊を導入、秋山勝行全学連委員長ら二八五人が大量逮捕される。中核派の危機に学生戦線指導に踏み込む。解放派の法政大学自治会室襲撃・リンチなど解放派と中核派がゲバルト衝突。
一〇月七日　自らが立ち合って高橋孝吉（全学連書記長）ら解放派学生幹部三人を法政大学経済自治会室でリンチ。
一〇月八日　佐藤訪ベトナム実力阻止羽田現地闘争の準備段階から革共同の総力を投入。重層的な戦術を計画。当日は現場に立ち、直接指導にも当たる。
闘争終了後、清水が「破防法が出るだろう。おれは潜る」といい残して姿をくらましたため、激怒。清水を呼び出し徹底的に詰問、批判。清水は真っ青になって自己批判。
同月　「羽田闘争の意義とたたかいの展望」（『前進』三五七号、三五九号）。
関西で小川登（関西地方委書記長、竹中明夫）が一〇・八羽田闘争にたいして「プチブル急進主義反対」「ブハーリン電撃的攻勢論の再現に反対」を唱え、中央政治局指導を拒否して路線的反対派を形成。竹中派が関西地方委およびマル青労同の多数を押さえる。マル学同組織はほとんどが竹中派とその路線を批判。
一二月　木下を関西張り付き指導に投入することを決断。竹中派は「佐世保を第三の羽田に」のたたかいに反対、『前進』配布を拒否し、党内闘争が激化。同月　「帝国主義の重圧をはねかえし巨大な進撃へ共同の決意を」（『前進』三六一号）。
同月　木下、清水、陶山ら政治局員を佐世保現地視察に派遣。翌年一月の米原子力空母エンタープライズ阻止の陣形を構築。
一九六八年　一月　「勝利にむかっての試練――革命的共産主義運動の一〇年とわが同盟のすすむべき道」（『前進』三六五号）。
同月　佐世保闘争の期間中、現地に陣取り指導に当たる。佐世保闘争は佐世保の労働者・市民・人民の驚嘆すべき大規模な決起、その先頭に立った全学連の実力闘争が爆発した。以後、三里塚空港建設反対・三里塚農民連帯、王子野戦病院開設阻止、沖縄闘争へとたたかいを牽引。
三月　「佐世保闘争と七〇年闘争」（『前進』三七三号）。
四月　「永久核基地化反対・本土復帰・基地撤去―沖縄解放闘争の綱領的問題について」（『前進』三七八号）。沖縄闘争の戦略的大きさと深刻さを明確化し七〇年安保・沖縄闘争の戦略路線を提起。
五月～　日大闘争にとくに愛着をもち法学部、経済学部、芸術学部、商学部、文理学部などのバリケード内での学習会や講演会にひんぱんに赴く。
六月　「社民の『最後の先兵』カクマル――恥ずべき転落の根拠を問う」（『前進』三八八号）。六・一五記念首都青年総決起集会（日比谷野音）にたいしてカクマルが集会破壊、中核派排除のため介入。野音にたいして武装襲撃、これを撃退。

八月　「七〇年への道」（『共産主義者』一八号）。
同月上旬　沖縄渡航制限撤廃闘争の重要性確認を契機に沖縄闘争の闘争概念を「沖縄奪還」と規定することを決定。以降、「沖縄奪還、安保粉砕・日帝打倒」の戦略的総路線を確定。
九月　法政大学で「チェコ問題と革命的共産主義への道」を講演。
一〇月　一〇・二一新宿騒乱闘争を指導。
一一月　騒乱罪粉砕・沖縄奪還・安保粉砕一一・一八大政治集会（渋谷公会堂）で「七〇年安保闘争の勝利のために」を講演（『前進』四一一号）。
一九六九年　一月　「歴史の分岐点としての六九年――革命的共産主義運動の新たなる飛躍をかけて」（『前進』四一六号）。
同月　東大安田講堂など砦決戦を支えぬく。
二月　慶應大学で講演「亡国の記念日――紀元節復活とその背景」（『前進』四二二号、四二三号に連載）。
三月二日　水戸巌（物理学者、救援連絡センター代表）の提唱で「反日共系革命諸派の討論会」に出席。いいだもも（共産主義労働者党書記長）、さらぎ徳二（共産主義者同盟議長）、鈴木迪夫（日本マルクス・レーニン主義者同盟書記長）と一六時間余におよんで論議する。司会は小長井良浩（弁護士、故山崎博昭君遺族代理人）、清水多吉（哲学者、クラウゼヴィッツ『戦争論』翻訳者）と水戸巌が討論に参加。社青同解放派とカクマルは招待されるも欠席。五月に『討論　七〇年をどうする』（田園書房）として出版。
同月　革共同・共産同・社会主義労働者同盟・第四インター日本支部・日本ML同盟の五政治組織共同声明「四・二八を突破口とし七〇年へ戦列を強化せよ」を発表。
四月　四・一七「七〇年闘争勝利・新入生歓迎大集会」（文京公会堂）で講演。
同月　「七〇年安保闘争と革命的左翼の任務」（『前進』四二九、四三〇、四三一号に三回連載）。七〇年安保・沖縄闘争の戦略を明らかにした画期的論文。
同月二七日　四・二八沖縄闘争を前に四・一七集会での講演発言を口実とする破防法第四〇条にて逮捕（七一年三月まで二年間未決拘留）。獄中からたえず同志を鼓舞。また獄中にてきびしい読書・研究プランをみずからに課す。本多獄中期間は陶山が書記長代行を務める。
一一月　「暴力の復権のために」（『破防法研究』三号）。
一九七〇年　獄中で「戦争と革命の基本問題」の骨格を執筆（七二年六月に完成、発表）。獄にあっても内乱・内戦――蜂起の路線の確立を指導。
七月　華僑青年闘争委員会による七・七告発を獄中で受けとり、党の根底的自己批判を支持。排外主義・差別主義とのたたかいを綱領的・戦略的・思想的に位置づけ実践するべく決意。
九月　「革命的日大生諸君に、獄中より連帯のあいさつを送る」。
「安保体制にかんする覚え書――現代帝国主義の軍事体制」を破防法裁判公判準備論考として執筆。
一九七一年　三月末　出獄。
春以降　さまざまな労働者・学生のなかにマルクス『経済学・哲学草稿』と『ドイツイデオロギー』の学習会を積極的に組織、研究と講義を重ねる。
八月　同志の恵子さんと結婚。披露宴（東京・法曹会館）には親族のほか井上正治九州大学教授、浅田光輝立正大学教授・破防法裁判を支える会世話人、小長井良浩弁護士、作家の瀬戸内晴美（寂聴）など多くの識者、仲間たちが参加。「旅の夜風」（映画『愛染かつら』の主題歌）を曲にあわせて舞った。
正確な日時は不明　中国共産党の周恩来が極秘で訪日。周の側からある人を仲介して会談申し入れ。東京芝公園の東京プリンスホテルで周＝本多会談。周恩来は日本の中国派諸党派が組織的に危機にあるなかで革共同を取り込もうと企図したと考えられる。周が多額の資金援助を申し出、本多はそれを蹴る。
正確な日時は不明　非合法体制下の印刷・出版体制の構築のため、椎野悦朗（一九五〇年時の日本共産党臨時中央指導部議長、所感派）と会談、協力を要請。
一〇月　「七〇年代・革命の時代」を「ドル・円問題＝日本はどうなる」講演集会で講演。
一一月　沖縄返還協定批准阻止の「第二の一一月決戦」を指導。非合法・非公然体制下における党の指導体制の確立に尽力。
一二月　陶山責任で人民革命軍・武装遊撃隊非公然機関誌『雲と火の柱』刊行。
非公然機関誌（月刊、配布限定）『革命の砦』の刊行を準備。
同月　カクマルによる辻敏明同志、正田三郎同志の虐殺、武藤一郎同志の虐殺にたいし警察＝カクマル連合粉砕、カクマルせん滅戦を宣言、全党に指令。

【内乱・内戦―蜂起へ新たな挑戦】

一九七二年　一月　「勝利の七二年を武装進撃せよ」（『前進』新年号）。七〇年代革命の内乱・内戦――蜂起の路線を明確にさせ、党の鉄の武装と「人民革命軍・武装遊撃隊」建軍を初めて提起。二重対峙・対カクマル戦争を内乱・内戦―蜂起のたたかいの端緒として積極的に位置づけ、戦略的防御の戦いのなかで全党の戦争体制、指導原則を強固に確立。
同月　「七〇年代型反革命」（『革命の砦』に掲載、『内乱期の反革命』所収）。
四月　「革命と反革命の絶対戦争」（『革命の砦』、『内乱期の反革命』所収）。
六月　「戦争と革命の基本問題」（『共産主義者』一三号）。暴力の社会史的本質を史的唯物

論的に創造的に把握し、プロレタリア暴力革命論を確立。内乱・内戦―蜂起の総路線を敷き、そのなかに二重対峙・対カクマル戦を位置づけた。武装し戦う革共同の骨格とその魂をかたちづくった綱領的基本文献。

七月　全学連大会で「反帝・反スターリン主義とは何か」を講演。

同月　「民族解放闘争に敵対する「ベトナム革命論」」（『革命の砦』、『内乱期の反革命』所収）。

九月　「レーニン主義の継承か、レーニン主義の解体か」（『前進』六〇〇号記念論文）。レーニン主義を全面的に復権する画期をなす。黒田＝カクマルがレーニン主義を小ブル自由主義に反革命的に解体するペテン的論理を完膚なきまでに批判。世界史的激動の七〇年代にふさわしいレーニン主義の創造的発展の基礎を確立する。

同月　「二重の内乱的対峙」（「革命の砦」、『内乱期の反革命』所収）

一一月　全学連講演集会で「革命的共産主義運動の歴史について」を講演。

同月　前進社出版部編『内乱期の反革命――カクマルの本質』を刊行、事実上の本多編著。

一九七三年　一月　「偉大な勝利の道」（『前進』新年号）。

三月　マル学同中核派理論合宿で「現代革命と史的唯物論の再建」を講義。

四月　「激化する破防法攻撃に抗し、党の非合法態勢・非公然態勢を強化せよ」（「革命の砦」）。

六月　「日本共産党の根底的批判と解体のために（未完）」を執筆。

八月　「革命闘争と革命党の事業の堅実で全面的な発展のために」（『前進』六四六号）。「革命的情勢への過渡期の成熟」という情勢規定をうちだし、これに対応した「革命党の三つの義務」を提起し、革命党の任務体系を明確化。そのなかに二重対峙・対カクマル戦を位置づけた。革命論を深化させた画期的な綱領的文献。

同月　マル学同書記局学習会で「前衛党組織論序説」を講義。

九月　沢山保太郎（全国部落青年戦闘同志会、全国部落研連合の責任者）が六月以来、革共同を基盤にした沢山天下の狭小な部落解放運動を願望、党内に「沢山党」をつくる方向を鮮明化させる。沢山フラクションを編成し、戦闘同志会や党常任など複数のメンバーに次々とテロルを振るう（八月、九月）。戦闘同志会の指導的メンバーたちが木下に沢山打倒を迫る。政治局で協議。沢山打倒闘争しかないと本多が決断。

同月　対カクマル革命的報復戦への突入を決断。九・二一戦闘の戦取とその後の数々の戦闘の実現へ、政治的＝組織的＝軍事的指導を全一的に貫徹する。

正確な日時は不明　フランス語版『資本論』を入手、読み始める。また対カクマル戦激化のなかでも革命後の中国社会、中国共産党の路線・政策や周恩来の果たした役割の研究を進める。

一九七四年　一月一四日　カクマル武装集団が破防法弁護団会議を襲撃。井上正治弁護団長、浅田光輝破防法裁判を支える会世話人をはじめ弁護士、諸人士、支える会会員が多数重軽傷。本多はかろうじて防衛される。

二月　月刊政治機関誌『武装』を創刊。

三～六月　「吉川文夫文書にみるカクマルの惨状」（『革共同通信』に六回連載）。

四月　「狭山闘争の歴史的な勝利のために」（『革共同通信』）。

五月　「カクマルの一・一四弁護団襲撃を弾劾する」および「破防法闘争の真の発展を」（『破防法研究』）。

八月　戦略的総反攻を宣言。「八月総攻勢を突破口にいまこそ戦略的総反攻へ」（『革共同通信』）。

同月　前進社第二ビルを開設、前進印刷所を始動。

一〇月　「戦略的総反攻――その勝利の展望」（『共産主義者』二六号）。

一一月　「松井文書にあばかれた反革命カクマルの腐敗」（『革共同通信』）。

一九七五年　一月　「七五年決戦で総反攻を完遂せよ」（『前進』新年号）。

三月一四日未明　たぐいまれな精神力と体力とをもって全同盟の指導にあたり、勝利への道を驀進しつつあるさなか、反革命カクマルの襲撃をうけ激闘のすえ暗殺される。享年四一。夫人恵子さん、長男力（ちから）君。

本多延嘉書記長は接した誰もがいうように、豊かな人間的感性にささえられた、まれにみる理論家であり実践家であった。慎重で堅実であるとともに、周囲が驚くような大胆さを示す創造的で柔軟な思考の革命家であった。

破防法を頂点とする国家権力の弾圧を矢面に立って打ち破り、破防法および警察権力と連合した黒田寛一や松崎明ら反革命カクマルを日本階級闘争からせん滅・一掃するために粉骨砕身たたかった。反帝国主義・反スターリン主義世界革命と日本帝国主義打倒にむかって革共同を率いてたたかうだけでなく、労働者・農民・市民や被抑圧民族人民、被差別人民、そしてたたかう左翼諸党派を含めたリーダーとなるべきことを期待されていた。

不世出の革命家・本多延嘉の全思想、全行跡を記録し、復権することは、未来社会を展望する土台となるだろう。

二〇二一年一一月七日第一次作成　※本年譜は前進社刊『本多延嘉著作選』第七巻巻末の「本多書記長の略歴」（白井朗執筆）をベースに大幅加筆修正。より詳細、より正確な年譜完成は今後に期する。

本多延嘉書記長追悼誌刊行委員会